

けつぱり先生

山口 瞳
けっぱり先生

新潮社





けつぱり先生^{せんせい}

昭和四十七年一月二十日 印刷
昭和四十七年一月二十五日 発行

定価 五八〇円

著者 山口瞳^{やまぐちひとみ}

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一
郵便番号 一六二
電話東京(280)二三番(大代)
振替 東京八〇八番

(乱丁・落丁のものは、本社またはお買
求めの書店にてお取替えいたします。)

けっ
ぱり先生
目
次

校庭	7
ピクニック	15
姉と弟	25
ランドセル	37
深夜の教室	48
古き花園	67
家族	80
ホーム・ルーム	94
夏休み	105

修学旅行	121
運動会	145
失 踪	165
新 年	190
立 春	218
校長の立場	239
対 決	261
卒業式	291
あとがき	301

装幀 岡本 爽太

けっ
ぱり
先生

校庭

「ちょっと、ちょっと、待ってくださいよ」

二階の校長室から、時折、校庭を見おろしながら話をしていた猪股が立ちあがった。猪股は、西都学園の女子高校、女子中学の校長である。

「すぐに戻ってきますから……。ちょっと、ここで待っていてくださいよ」

猪股は少し巻舌だった。そのために、待ってくださいよという言葉が、待ッテクラッセイヨに聞こえた。

新聞社の学芸部員で、教育欄を担当している宮川は、猪股とは初対面である。

猪股は五十歳前後という年齢だろう。肥満型であるが、体の動きは軽い。宮川には、猪股の言葉づかいにも体つきにも好ましいものが感ぜられた。

宮川は、職業柄で、何人もの教育学者や現場の教師に接している。猪股は、宮川が会ったどの教育関係者にも似ていなかった。どこが違うかというところが、すぐ

にはわからない。強いていえば親しみやすさだろう。その親しみやすさがどこからきているかということを、ぼんやり考えていた。

三月の半ばの土曜日で、陽が沈みかかっていた。あけはなした窓から快い風がはいってくる。宮川は今日が暖かい日であったことを思いだした。

猪股が校庭に姿をあらわした。彼は駆けだした。

猪股の進んでゆく方向に、一人の少年がいた。宮川は、校庭には、もう誰もいないと思っていたのだ。

少年は、のびのびした体つきをしていた。頭を短く刈っていて、ラグビーかサッカーの選手のように見えた。体は、もう大人であるが、どこかに幼さが残っていた。

少年は本を読んでいる。本から目をはなして首をふったりする。暗記しようとしているのかもしれない。

猪股が少年に近づいて、そっと肩を叩いた。少年はびっくりしたように猪股を見て、ぎこちなく直角に体を折り、頭をさげた。

猪股が少年に何か言った。それに対して、少年は、みじかく答えたようだ。二人の話は宮川には聞こえない。

三月の半ばで、授業はまだ始まっていない。校庭には、猪股と少年の二人だけが見えている。

夕陽が校舎のガラス窓に赤く照っている。どうして猪股が宮川との話を中断して、少年のところへ駆けつけたのか

かということがわからない。

しかし、宮川には、誰もいない校庭の中央で、夕陽を浴びて話しあっている校長と少年という光景も、何か感じのいいものに思われた。一枚の絵であるようにも思われた。

その光景は、なぜか、宮川の頭に強く焼きついた。その後も、なんだか思いだすことがあった。夢に見たこともあった。

卒業式に『仰げば尊し』を歌わなかった学校があることを宮川は知った。生徒に歌わせなかったのである。

学芸部長から、校長の話をきいてくるように頼まれた。部長の娘が、その西都学園の中学にいた。

「娘の話だから、さっぱり要領を得んのだがね。なにか面白そうなんだ。校長の話が面白かったっていうんだ。變つてる人らしいね。私は父兄だから、評判はきいたことがあつた。話をきいてきてくれないか。談話をのせてもいいし、場合によっては随筆でも書かせてみたら……」

仕事としては単純だが、宮川にも興味があつた。

「やあ、どうも失礼しました」

猪股は汗をかいていた。

「あなたもどうぞ、飲んでください」

彼は茶碗を唇にあてて、天井をむくようにした。ノドが鳴った。

「はい」

宮川は用件をすぐにはきりだせなかった。

「林っていうんですがね……。いや、あの生徒ですよ」

猪股は窓の外を見た。宮川も見ただ。

「帰ったようだな」

校庭には、もう誰もいない。

「あの野郎は、大学の入試に失敗しましてね。……落っこちましたんですよ」

「浪人ですか」

「そうなんです。あれも、うちの生徒なんです。ああ、ご存じですか、男子校のことは……」

西都学園は、小学校、中学校、高等学校、女子短大で構成されている。中学校以上は男女別学で、男子のほうは一駅はなれたところに校舎がある。それを男子校といっている。

「ごめんなさい。あの野郎だなんて……。私は口がわるいもんだから」

宮川には、それが、むしろ、猪股の少年に対する愛情のように受けとれた。猪股につりこまれるようにして笑った。

「あなた、私が林になんと言ったと思いますか」

猪股が宮川を直視した。のぞきこむようにして見るのが猪股の癖であるらしい。

「勉強しろよって言ったんですよ。そしたら、林のやつ、

ハイって答えたんですよ。どうだ、勉強しているかって言ったら、ハイ、勉強していますって言いやがった。ねえ、ちよつといいでしょう、あの子供」

宮川は、見えなくなった少年の体恰好を思いだそうとした。

「それだけです。私は、それをあいつに言いに行ったんですよ。おかしなもんですね。学校の教師なんてものは……」

猪股は、大きな声で、はずみをつけるようにして笑った。宮川はしかし、猪股の表情に暗いものを感じた。何か隠しているのではないかと思った。

「ところで、どういうご用件でしょうか」
笑ったあとで、猪股が真顔になった。

「ああ、失礼しました。……実は、こちらの学校では、卒業式の日に『仰げば尊し』を歌わなかったという話を聞いたもんですから、それで……」

「小学唱歌ですか」

「そうです。『仰げば尊し』という歌のことを卒業式の歌というでしょう。『君が代』を拒否した小学校なんていうのはありましたけれど、卒業式の歌を歌わなかった学校は珍しい」

「……………」

「生徒に歌わせなかったのですか、それとも生徒のほうで

拒否したのですか」

宮川はメモ用紙をとりだした。猪股は黙っていた。沈黙がながいので、宮川は猪股の顔を見た。猪股の顔は、わずかに紅潮しているように見うけられた。

「私が歌わせなかったんですよ。それで、だいぶ父兄に叱られました」

「どうして？」

「まあ、あの歌は、卒業式のきまりものだっていうんですね。その瞬間を胸にきざみこんで上級学校へ行ったり、社会に出たりするもんだって」

「それはそうでしょうね」

「宮川さんもそう思いますか」

「常識的には、ですよ」

「そうですね。……卒業式というのは、教師にとって、もっとも屈辱的な日なんですよ」

猪股は、その言葉を、一語一語、区きるようにして言った。なにか、吐き捨てるような調子だった。宮川は猪股が怒っているのかと思った。こういうときは、むしろ、怒らせたほうが、いい談話がもたらえることを知っていた。

「屈辱的な日ですか」

「……………」

「卒業式というのは、先生にとっても生徒にとっても晴れがましい日なんじゃないですか。ぼくらの小学校では紅白

のマンジュウをくれましたよ」

「じょうだんじゃないですよ」

猪股は、それを大きな声で言った。

「……………」

「ごめんなさい。すぐに私は大声になる。……屈辱的というのは、こういうことなんです。卒業式というのは、私どもの力が足りないために、未熟なままの生徒を送りだしてしまふ日なんです。教師にとって、こんなに辛い日はないんですよ。私は、本当に土下座してあやまりたいくらいなんです」

「……………」

「それを、いきなり、仰げば尊し、なんてやられてごらんなさいよ。なにが尊いもんですか。いま、うちの学校に尊敬されるような教師は一人もいませんよ。私は、そう思っているんですよ。もちろん、校長の私をふくめての話なんです」

猪股は、それを恥ずかしそうに言った。宮川は、すこしわかってきたように思った。猪股が休つきに似あわずに繊細な神経の持主であることを知った。

「それを生徒に言ったんですか」

「そうです。どうして『仰げば尊し』を歌わせないかということを説明したんです。けっしてキザだと思ってくれない、私は辛いんだって。あのくらい、教師にとって辛い歌

はないんだって」

「生徒の反響は？」

「笑うやつと、わからないやつと、悲しそうな顔をするやつとが同じ数ぐらいでした。そのうちに先生の気持がわかるようになるから、かんべんしてくれて言ったんですよ。なにしろ、これは、私のほうのわがままなんですからね」

「なるほど」

そこへ、三十代の半ばぐらいの教師がはいってきて、猪股の脇に立った。

「ああ、ご紹介しましょう。私のところの教師の玉井くんです」

「玉井です」

「こちらは、宮川さん。さっき、電話で話した……」

玉井は頭をさげ、猪股の隣に坐った。

「宮川さんが取材にいらっしゃるといいうので応援を頼んだんですよ。なにしろ、私は話が下手ですから」

「それは、どうも。せっかくお休みのところを申しわけありません」

「いや、なに、みんな近所に住んでいるんですよ。校宅なんです。……学校の塀を乗りこえれば二、三分で来られるんです。生徒は部落といっていますからね」

「これがオンボロ部落でしてね」

玉井が気さくな感じで猪股の言葉をひきとった。

「夜中でもなんでも校長から呼びだしをかけられるんです」

「お前は、またすぐに調子に乗るからいけない。ねえ、宮川さん、こういう奴等ばかりなんです。おわかりになったでしょう。『仰げば尊し』なんていう教師じゃないんですよ。……ああ、玉井くん、いま、その話をしていたところなんだ。例の卒業式の歌のことだ。お前だってそう思うだろう。卒業式ってのは、教師にとって、悲しい、辛い、屈辱的な日だって……」

玉井は、宮川にむかって首をすくめるようにした。こういう校長なんです、と言っているように思われた。

「ところで猪股先生の渾名はあるんですか」

猪股と玉井とが困ったことをきかれたといったふうに顔を見あわせた。

「これは、玉井先生にうかがったほうがいいかな」

「けっぱりです」

猪股は、余計なことをいうなというように玉井の肩を突いた。

「けっぱり？」

「そうです」

玉井は、かまわずに続けた。

「ドイツ語かなんですか」

宮川がそう言ったので、また、猪股と玉井とが顔を見あわせて笑った。

「東北弁でございますよ」

猪股は、まっかになって、苦しそうに言った。こんどは宮川が赤くなる番だった。

「けっぱりというのは、がんばるとか踏んばるという意味です。青森、秋田、岩手、宮城なんかでは、そう言いますね。校長は宮城県の出身ですから」

「おい、こら、玉井。なんにもお客さんの前で俺の出身地をばらすことはないじゃないか。せっかく俺が標準語でしゃべっているのに」

しかし、猪股は、おいこらというのは、オエコラであり、標準語はヒョウズンゴと発音していることに自分で気づいているのだろうか。

「ははあ、すると、ガンバリ先生という意味になりますか」

「もうひとつは強情先生。同じような意味ですが。……うちは校長でなく強情なんです」

「また、余計なことを言う……」

猪股が玉井の膝を強く打った。

宮川は、メモ用紙に、けっぱり先生と書き、強情先生と書いた。

「うちの校長は、毎年、夏になると、甲子園の高校野球大会を見にゆくんです。それも開会式だけ見て帰ってくるん

です。もう二十年ちかく続いているでしょうか」

「それは大変だ」

「それで、ネット裏から、けっぱれエッと叫ぶんです」

「がんばれッ、ですわ」

「そうです、私も一度、校長につれていかれて恥をかきました。みんながこっちを見ますからね」

「おい、こらッ、もうだまれ」

「甲子園へ行って、氷のカチワリを飲み、カレーライスを食べて、すぐに帰ってくるんです。このごろは新幹線が来て、らくになりましたが」

「いや、いい話だな」

宮川は、高校野球、カチワリ、カレーライスとメモした。

「そんなこと書かんでくださいよ。恥ずかしい」

「……………」

「私は、宮城県で中学の教師をしていたときに野球部をつくったんですよ。それで、私がこちらの学校に赴任した翌年に優勝しましたね、甲子園に出場したんです。惜しいことをしましたね。もう一年いればよかったんです。それがくやしいもんですから、毎年行くだけの話なんですよ」

宮川は、麦わら帽子をかぶってネット裏に坐っている猪股の姿を思い描いた。一緒に行ってみたいような気分になった。

「高校野球は、やっぱり、東北地方を応援しますか」

「そんなことはありませんよ」

「しかし……………」

「どこも応援しないんです。私は、あそこへ行って若さを吸収するんですね。自分の若さを掘りだしに行くんです。それと、初心といいますかね、ウブな気持ちを勉強しに行くんです。それだけのことです。勝手なもんです」

「校長は、酒のほうは？」

そこでまた、猪股はだまってしまった。宮川はメモ用紙から目をあげた。猪股がだまっていることで、宮川は、だいたいの様子が察せられた。体つきも顔も大酒家の相をしていると思った。

「それより、宮川さん……………」

玉井が言った。

「猪股校長は、去年、お子さんが生れたんですよ」

「えっ！ お孫さんでなく……………」

「お孫さんも、まもなくお出来になると思われませんが」

「おい、玉井。いい加減にしないか」

「事実ですから仕方がないじゃありませんか」

「事実だからしゃべっていいということはないだろう」

「いえ、これは、美談です」

「ばかやろう」

猪股は本当に怒ったように立ちあがって、両腕を動かした。

「まあまあ、喧嘩をなさらないように……。それで、猪股先生の奥さまはお幾つですか」

「四十四歳です」

猪股は、わるびれずに答えた。

「けっぱったわけですね」

「たいへんなけっぱりです。校長もけっぱるし、奥さんもけっぱった」

「だいたいね。こいつらがダラシがないんですよ。なんだい、一人か二人の子供をつくって、もう結構だなんて。……とんでもない話だ」

「猪股先生は、お子さんは何人でいらっしゃいますか」

「八人です」

と、言ったのは玉井である。

猪股は窓のほうへ歩いていった……。

宮川は仕方なく玉井と話をすることになった。西都学園のあらましのことがわかってきた。変った学校であるけれど、ここには何かがあると思われた。

歌がきこえてきた。

それは卒業式の歌のメロディーだった。猪股が窓から外を見ながら口ずさんでいる。

仰げば尊し わが師の恩

教えの庭にも はや いくとせ

.....

校庭はすっかり暗くなっていた。宮川も立ちあがって猪股に近づいた。校庭から、いい匂いがただよってくるように思われた。

猪股が深呼吸した。

「宮川さん、どうですか。なんかいい匂いがすると思いませんか」

「私も、そう思っていたところです。なにか花があるんですか、梅かなにか……」

「さあ、この学校には梅はなかったと思いますよ」

「なんででしょうね」

「なんだかわからないんですよ。とにかく、春になると、いい匂いがするんです。どこかの家の梅かもしれない。ちがう花の匂いかもしれない。あるいは木の芽の匂いかもしれない。どうもよくわからないけれど、なにか匂ってくるんですね」

「……………」

「あなたも深呼吸してみませんか」

宮川は、猪股に言われて、大きく息を吸い、吐きだした。こんなことをするのは何年ぶりのことだろうかと考えた。隣にきた玉井も大きく胸を張った。呼吸がきこえた。

「私はね、何が幸福かということがわからない。生徒に質

聞されても困ってしまう。しかし、春になって、いい匂いがすると思ったときは仕合せであるような気がしますね。これは不思議ですね」

「……………」

「教員をやっているせいでしょうかね。なにか体に力が湧いてくるような気がするんですよ。花の蕾を見たり、地面になにかわからんが緑の芽が出ているのを見たりしますとね、変に勇気が出てくるんです」

「……………」

「ようし、今年はやってやろうというような……。もっともね、卒業式が近づいてくると、またケチヨンとなりますすがね」

宮川は、ひとつのことに気づいた。宮川が初対面の猪股に親近感を抱いたのは、猪股の人間臭さではあるまいか。ひととなつこさではあるまいか。

人間臭い人間が減ってきていると宮川は思った。そうして、教育者に必要なことは、人間に対する興味ではないかと思つた。宮川はいい原稿が書けそうな気がした。

宮川の勤める新聞社では、人間関係が稀薄になり、よそよそしくなっている。

「校長は、張りきることと張りきるけれど、反省癖も強いんですよ」

玉井が言った。

「お前は、また余計なことを言う。あ、そうだ、玉井くん、こんどの日曜日に宮川さんもお誘いしたら……」

「それはいいですね」

「宮川さん、私ら、毎年、三月の第三か第四の日曜日に草摘みをするんですよ。よかったら、いらっしゃいませんか。ツクシやセリやヨメナを採るんですが、なに、それにかこつけて一杯やるのが目的でね」

また、校庭からいい匂いがただよってくるような気がした。宮川は、もう一度、深呼吸してみた。